

坊の海に魅せられて ～父娘で活かす磯根資源～

久志漁業協同組合
下向みどり

1 地域の概況

坊津は、薩摩半島の南さつま市南部に位置し、東シナ海に面し、海に山々が迫る地形である（図 1）。また、江戸時代まで海外交通の要所で、貿易港として栄えた地域である。

2 漁業の概要

久志漁協では、定置網、建網、一本釣、曳縄、素潜り漁等の漁業が営まれ、平成 16 年度の組合員は 133 名、水揚数量は 62.5 トンである。水揚げの多い漁業種は定置網で全水揚げの約 3 割を占める。

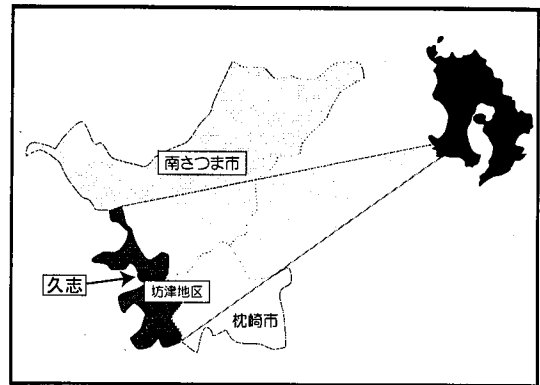


図 1 南さつま市坊津の位置

3 研究・実践活動取組課題選定の動機

小学校から故郷である坊津に移り住み、父が漁業を始めてからは、手伝いをしながら、素潜りで海中観察をしていた。県立鹿児島水産高校でポンベを使った潜水実習などを通じて海のすばらしさを体感しました。その後、水族館の採用試験を受けたが残念ながら叶わず、枕崎で海とは関係のない仕事に就いた。その後父から「漁を一緒にしないか」と声をかけられ、現在に至っている。

漁業に着業して私が一番楽しいのは、海の色々な生物やその生態が見られることである。

素潜り漁を始めた 4 年前は、生物を見るのに夢中になって採ることを忘れてしまい、よく父に怒られた。今は息の長さも倍くらいになり、それにつれ漁獲量も増加した。初めは父の後をついて潜っていたこともあり、父の半分も採れなかったが、最近では父と五分五分か、上回る時もあり、上達していると実感する。「やっけて良かった、またがんばろう」という気持ちになる。まだ父からは「動きに無駄がある」と言われるので、もっと素潜りがうまくなり、いつかは父を追い越したいと思っている。

現在、私と父は、0.6 t の船外機船で、素潜り漁とイセエビ建網を組合わせて操業している（5～8月のイセエビ禁漁期と行使規則によるイセエビ建網の休漁日は素潜りのみを行う）。

素潜り漁は、毎日少しづつ漁場を変え、タカジ、クロミナ、アナゴなどの貝類や、注文に応じて釣り餌用のガンガゼを取る。素潜りでの 1 日の漁獲は 10kg 程度、重量比でクロ

ミナ5割, アナゴ4割, タカジ1割程度である。

この魅力的な海で漁業を続けるため, 私の好きな海中の生物観察を磯根資源の保護に生かせないかと考えた。

4 研究・実践活動状況及び効果

漁獲対象の種については, 特によく観察することで, 資源保護につながりそうなことがあれば積極的に実践している。私の利用している貝類の生息水深は図2のとおりである。

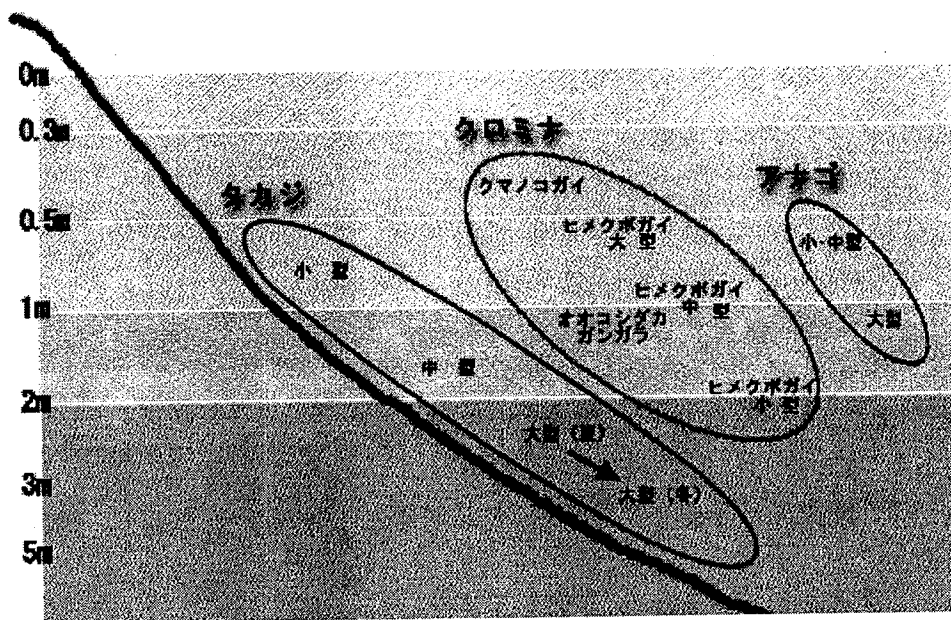


図2 貝類の生息水深

①タカジ

タカジと呼んでいるのは, ギンタカハマ(図3)が主である。タカジは水深1~3mの瀬で, 大型ほど深い所にいる。冬には大型は水深5m程度まで移動し, 特に大きいものは底の方の穴の中に入り, 暖かくなると浅場に移る。私の採捕する貝の中で, 水温により移動するのはタカジだけのようである。

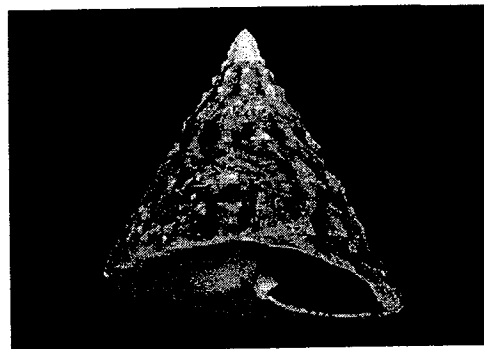


図3 ギンタカハマ

6~8月には径が4, 5 cm以上の貝で2個体ずつペアになっているものが見られる。同じ時期に, 貝殻の平らな部分に赤紫の付着物がついているものも見られる。以前は夏場だけ見られたが, 現在は水温変化の影響か, もっと遅い時期にも見られる。私はこの時期が産卵期なのではと考えている。

②クロミナ

クロミナと呼んでいるのは、クマノコガイ(図4)、ヒメクボガイ(図5)、オオコシダカガンガラ(図6)の3種である。

水深30～50cmの一番浅場にいるのはクマノコガイで、大型は波では動かない大岩に付いている。

水深50cm～1mには大型のヒメクボガイが、それより深い所には中型がいて、小型は水深1.5m位にいる。ヒメクボガイは、波でも動くような径30～60cm位の石にも付いている。

オオコシダカガンガラは、中型のヒメクボガイと同じ水深にいるが、あまり採れない。

クロミナは潮の満ち引きで移動し、満ちる時に岩の表面に現れて、引く時に岩の下面に隠れる。

ヒメクボガイ、クマノコガイは、6～8月に集団になっている。これらはタカジと違い、大きいものが中心に1個いて、その周りにやや小さいものが5～6個固まっている。中央の大きいものが雄か雌で、周りの小さいものが異性で、これが産卵行動なのではと考えている。

8、9月には1cmに満たないヒメクボガイや、オオコシダカガンガラが見られるようになる。

9月以降になると、3cm以上の大きなものがへい死しているのを見るようになり、産卵後は死んでしまうのではないかと考えている。

③アナゴ

アナゴ(図7)は浅い場所から、水深1.5m位まで生息し、小さい時はほとんど穴に入っている。潮が満ちる時に這っているのだから、潮を見計らって取った方がキズがつかない。

不思議なのは、3～4cmまでの小型貝で、貝殻では判別できないが、殻からはみ出した軟体部がピンク色の貝と、茶色の貝がほぼ同数いることである。これより大型のものはすべて軟体部が茶色である。生息場所も同じで、同じ種類なのかと不思議である。

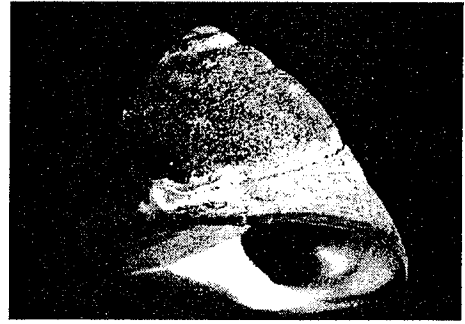


図4 クマノコガイ



図5 ヒメクボガイ

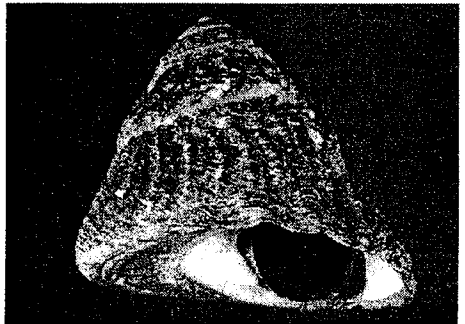


図6 オオコシダカガンガラ



図7 アナゴ

④ガンガゼ

ガンガゼ(図8)の生息水深は夏は2~5m位で、冬はやや深くなり3~6m位になる。岩だけでなく、サンゴの間や瀬にも生息している。

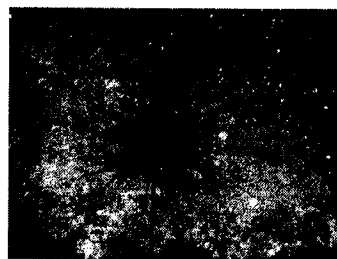


図8 ガンガゼ

以上、日頃の観察結果をもとに、漁獲するサイズは、タカジは、底面の直径が約3cm以上、クロミナは1.5cm以上、アナゴは5cm以上としている(図9)。漁が少ない時でも、とにかく小さいものは採らない。

アナゴは浅めの場所にいるので潜って大きさをゆっくり見ることができる。クロミナとタカジは海中の握り具合で判別するが、船にあげるとやはり小さいがあるので、選別し小さいものは再放流する。

産卵行動をとっていると思われる貝や固まって生息している時は、根こそぎ採らないよう、漁獲する種類が集中しないよう心がけている。

例えば、漁獲する時はなるべく重量が重いヒメクボガイを狙うが、ヒメクボガイは固まって生息しており、そのみを狙うと取り尽くしてしまう恐れがあるので、他のクロミナを採って調整している。

また、ガンガゼは漁獲サイズとして6cm前後のものを、一度に2~3日分を採る。棘を根元から折ると死にやすいので、ステンの引っかけで岩からはがし、カゴに入れて活かしている。

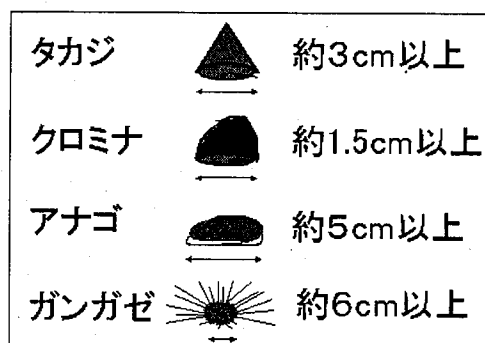


図9 漁獲サイズ

5 波及効果

このように毎日少しずつ漁場を変えることや、自主的な漁獲サイズの制限などにより、資源を乱獲しないよう心がけることで、安定した漁獲が得られるようになっている。

また、貝の生態に合わせた採捕を行うことで、漁獲の効率を良くし、アナゴなどはキズを付けないよう採ることで商品価値を上げることにもつながっている。

さらに、大きいサイズを選んで採ることで単価が安定していると考えられる。

6 今後の課題や計画と問題点

資源をうまく再生産させて、永続的に利用できる方法を探っているが、今後は、生態に応じた資源の有効利用も検討していきたい。

例えば、産卵後死んでしまうような大きいクロミナを採捕することや、アナゴの軟体部がピンク色のものは、5cm以上にならない種であれば、5cm未満のものを採捕するこ

とも可能である。

また、ガンガゼの活かしでは、高水温時にはへい死が見られるので、水温と活かしの密度の関係を調べ、へい死を減らして資源の無駄遣いにならないようにすることも可能である。

その他、現在利用している貝の他に利用できるものがないかの検討も、今後取り組む計画である。

いままで話した観察結果は私の個人的なものであり、大学や県の水産技術開発センター、普及員など専門的な知識を持つ人たちに協力をもらい、さらに詳細な観察を行い資源保護や有効利用について考えていきたいと思っている。

磯根資源の保護や育成、密漁への対策については、隣接漁協の漁業者との連携、協力も行っていきたい。

ここ坊津は、自然も、心も、伝統も豊かで、私にとって暮らしやすい漁村である。また、この仕事が続けられるのも、坊の海の豊かさのおかげだと思う。漁業は、魅力的で、「これからも続けていきたい！」「もっと海のことが知りたい！」と思っている。

漁業という仕事は、根性が必要だが、やる気次第で女性もできると思う。

私が漁業を続けているのは周囲の人々に支えられているところが大きく、特に父は、楽しいながらも危険であるこの仕事を勧め、辛抱強く指導し、今も厳しく見守ってくれている。父と共に操業できる安心感があるからこそ、漁業を続けているのだと思う。

改めて皆さんに感謝し、この魅力的な坊の海で頑張っていきたい。